

立命館アジア太平洋大学 Green Commons

Green Commons

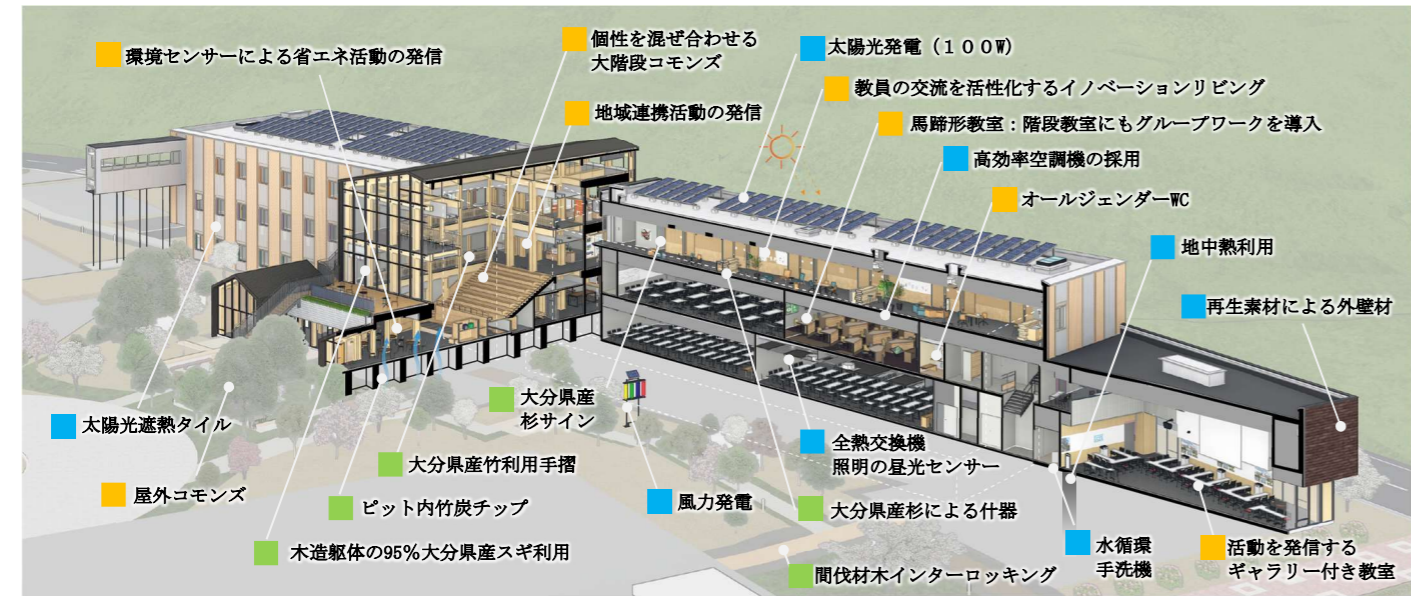
No. 13-088-2025作成

新築
学校

発注者	学校法人立命館	カテゴリー	A. 環境配慮デザイン B. 省エネ・省CO2技術 C. 各種制度活用 D. 評価技術/FB
設計・監理	株式会社竹中工務店 大阪本店 設計部 TAKENAKA CORPORATION	E. リニューアル F. 長寿命化 G. 建物基本性能確保 H. 生産・施工との連携	
施工	株式会社竹中工務店	I. 周辺・地域への配慮 J. 生物多様性 K. その他	

- ① 人を育む：交流を生み、学びの循環を促進する
- ② 地域を育む：地産地消、自然エネルギー利用
- ③ 地球を育む：再生素材、天然素材を利用した有機的計画

人×地域×地球を育む：3つの取組みの実施



学生の約半数が世界105の国・地域(2024年5月時点)から集まる留学生で構成される、立命館アジア太平洋大学において、新学部であるサステナビリティ観光学部新設を契機として新たに建設された教室棟。

「人×地域×地球を育む」3つの取組みを環境コンセプトとして設定し、建築を建てるプロセス自体が教材となる建築を目指した。産官学地が連携して課題を解決し、さらに学び舎から人、地域、地球を育み続ける、循環を生む拠点となることを中央の木造吹抜空間により実現した。

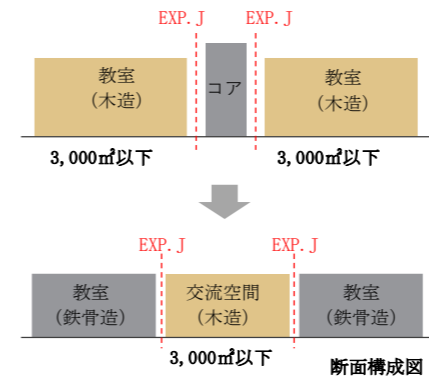
九州・大分県の林業の課題に、「蓄積するスギの有効利用」がある。準耐火燃えしる設計により、大学で大規模活用事例がなかった木造三階建て学校(木三学)をはじめ実現した。高度な技術が必要とする耐火構造による都市木造ではなく、汎用性が高い大分県産材を地産地消した太いスギ柱による力強い木造吹抜空間は、多様な人が集い地域を育む交流拠点となり、地方大学の新しいあり方を象徴する、モデル構築となることを目指した。



建物データ	省エネルギー性能	CASBEE評価		
所在地	大分県別府市	BEI (通常の計算法)		0.59
竣工年	2023年	BPI (通常の計算法)		0.72
敷地面積	345.137㎡	建築時LCCO2削減率		40%
延床面積	6.495㎡	BELS★★★★★		
構造	木造・鉄骨造			
階数	地上3階			

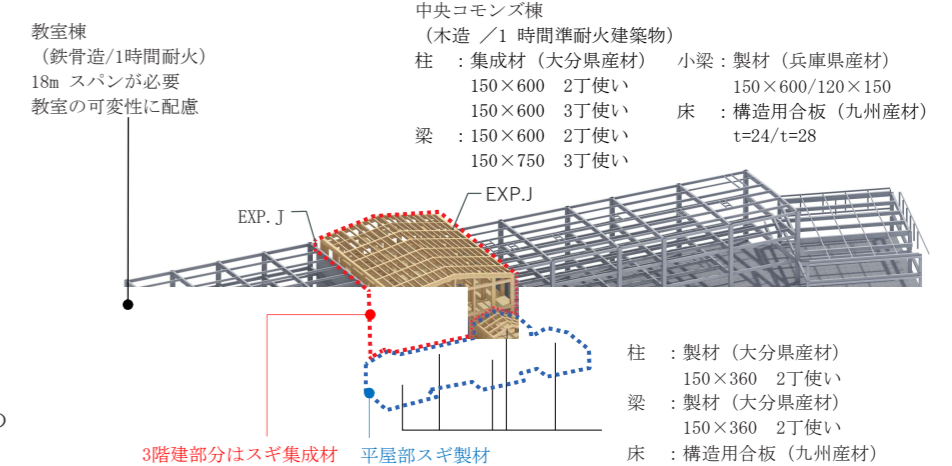
地域を育む：木三学(準耐火木造3階建学校)の活用を大学へと広げる

●小中高]モデルから大学モデルへの転換

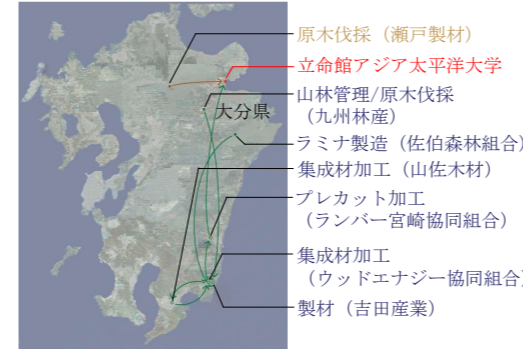


大空間が必要な大学に対し、中央に木造の交流空間とした適材適所の構造形式

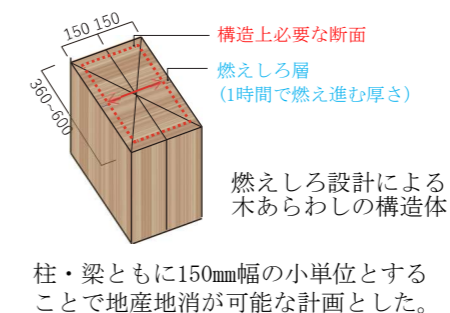
●木三学(準耐火木造3階建学校)の活用を大学へと広げる構造モデル



●九州にて完結する木材流通加工ルートの開発



●高度な技術を用いず地方にて実現可能な燃えしる設計を採用

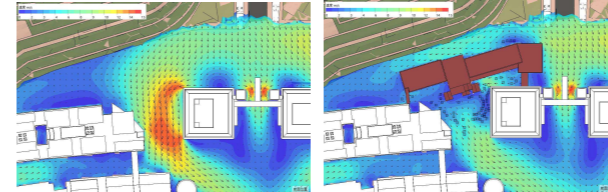


●接合部の技術も大分県の技術とし効率的な建方を実現



地球を育む：自然エネルギー・素材活用の取組み

●強風を和らげる建物配置



強風を低減、外部の居場所を生む建物配置

●自然エネルギー利用



太陽光発電 風力発電 地中熱利用 水循環手洗い

●再生材、天然素材を用いた温かく地球と人にやさしい施設計画



躯体試験材を再利用した県産スギサイン リサイクル材を利用した外壁仕上げ 別産竹細工技術を用いた吹抜手摺



躯体試験材を再利用したカウンター 間伐材を再利用した木ブロック舗装 廃プラスチックを再利用した外構舗装材

設計担当者

建築：永井務、野村直毅、地田聡、金井理佳/構造：前川元伸、須賀順子、木原隆志、内山元希、木下康仁/設備：佐藤弘康、原大輔

主要な採用技術 (CASBEE準拠)

- Q3.1. 生物環境の保全と創出 (外構緑化、地域の郷土種への配慮、既存樹木の植えかえ)
- Q3.2. まちなみ・景観への配慮 (地域性のある素材、歴史性の継承、木造建築による新たなシンボルの形成)
- Q3.3. 地域性・アメニティへの配慮 (建物利用者の設計への参加(ワークショップの実施)、強風を和らげる建築配置)
- LR1.1. 建物外皮の熱負荷抑制 (PAL、BPI (PAL*)) 性能向上、太陽光遮熱タイル)
- LR1.3. 設備システムの高効率化 (BEIの向上、LED照明、センサー制御)
- LR3.1. 地球温暖化への配慮 (LCCO2削減)